

美術の窓(56)

蕪村と山雪

大和文華館館長 吉川逸治

本年は開館35周年の歳にあたり、それを記念して、今秋、特別展「対幅—中国絵画の名品を集めて—」を開催いたします。

中国人のものの考え方として、古来より、ものごとは一面的に見ないで、両面的、あるいは多面的に見ることをよとする伝統があります。そこから、文学の場合では、詩や詞における(対)表現が生まれ発展しました。絵画の場合でも、対幅(双幅、三幅、四幅、八幅など)の形式を生み、表現を豊かなものにしました。

今回の特別展は、当館学芸部の藤田伸也君が担当しますが、その内容については、本誌掲載の同君の特別展の概要をお読み下さい。

今回の「美術の窓」は、前回に引き続き、かつての特別展図録『与謝蕪村』(昭和58年1983)、『狩野山雪』(昭和61年1986)に載せた挨拶文を抜粋して、掲載いたします。

*

今年(1983年)は蕪村の没後二百年記念の催しとして、大和文華館でも秋の特別展を近世絵画史上にも、俳諧史上にも、生新多彩な業績を残したこの大家のために捧げることになりました。

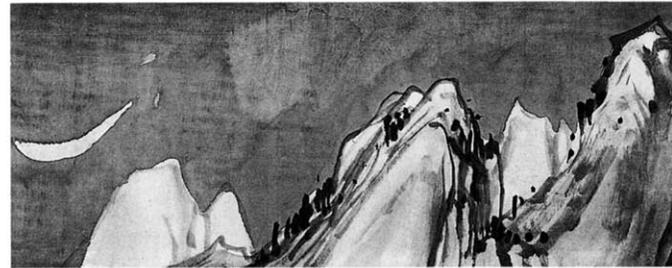
蕪村は、大器晩成型の画家であったと想はれます。絶えず学び、絶えず変貌し成長して、止むところを知らずと申せませう。

若い頃、江戸に出て、東國の地にあり、俳諧とともに画を学び、画家となり、狩野派を習ひ、英一蝶流の風俗画にも馴染んだらしく、風景花鳥のみならず、人物画もよ

くし、遺墨若干を伝えて居ります。中年、京に戻り、時に丹後、時に讃岐と居を転じ、すでに独自の筆意を示す優作をものし、やがて京都に落着き、俳壇の雄たるとともに、ますます画技に励み、屏風・掛軸・俳画と多産な時を過します。京洛の交友に教養を重ね、時流に迎えられる中国諸家の画法を次々に摂取し、遂に南画の大家として、大雅と並び称せられる程になりましたことは、すでに皆様がよくご存じの通りでございます。

江戸後期は、流派のいかんを問はず、画壇の大勢、写生を重んじ、たとへ流儀に従ひ、手本に倣ふとも、实景の印象を画中に納めることを怠らず、特に蕪村は写実の意強く、学ぶに従ひ、画風は変じて、写実の態度は変わらず、名画「鶯鴉図双幅」に見る如く、鋭い視覚の追求で諸派の画法は、蕪村の画想を実現するための手段として、現象を造形化するために使用し尽されるのでした。

蕪村の描く自然—山・樹・家・川・人物など—は具体的で、だんだん豊かなヴォリュームを備へて、大きな塊小さな塊となって確と画中に納まり、しかも対角線など、主導線に沿うて、画中に緩急の動勢を生じ、現実から夢幻へと観者の想像を促します。南画の繊細な筆触は、光と陰で物象を大きく柔かく包み、大気に雲霧を生じ、彼の意のままに筆が動くのを感じます。そして、生々写実から俗臭を除き、次元の高い实景の造形化を達成させます。



峨嵋露頂図巻(部分) 蕪村筆 重要文化財

きて、最晩年の作中、夜色樓台図、叡岳眺望図、峨嵋露頂図、鶯鴉図双幅、富嶽列松図などでは、細かい筆触を採らず、太い筆線で墨と色とを鮮かに塗って、形をかため、構成をコンパクトに堅め、かくて純化された画像は、観者に多様の意味を放ち、象徴性を帯びて参ります。俳諧と絵画との修業に生涯を捧げた蕪村が最後に到達せる画境で、これぞ真の俳画ではないでしょうか。

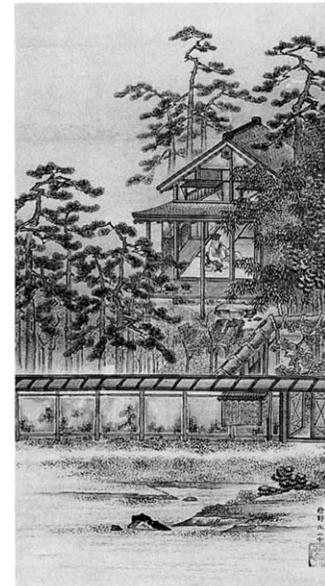
* * *

今秋(1986年)の特別展は、狩野山雪の後を継いで京狩野の宗家となった「山雪」がいかに新時代の絵画を創作せんと努めたかを顧みることを課題として準備し、展示しました。

激しき戦乱は治まり、青葉若葉の日の光と平和を謳歌する時代となって、世は整頓、荒事は抑へ、礼学を奨励、余暇には人々も遊芸読書を学ぶ。絵画もその風潮を反映す。狩野派は狩野探幽らが幕府の御用絵師に任ぜられ、所謂近世アカデミズムが始まる。画家は職人にあらず、筆法賦彩経営描写と秩序立てて画を学び、写実に尽すのみならず、和漢の名画の迹を尊ぶ。師自ら大家の許に集まる古画名跡を縮図に写し蒐め、作画鑑識の手本とす。絵画教育が組織化される。画家は漢籍を繙き、和歌を学び、学者文人と交り、画想を深め、その主題のみならず、山水人物の経営布置に何らかの知性の響きを露呈せねばならぬ。

山雪は、京狩野の主として、か

かる新しき教養の絵画の代表的大家たるに最も恵まれた環境にあり、西洋絵画史に例をかりればルネッサンスに続くマニエリスムの大家に比類すべきか。したがって、画は創作となり、技巧に凝り、しかも単なる画工の技にあらず、画中の自然に織り込まれし象徴、学殖を汲み取れと促す知的創作となる。子、狩野永納は『本朝画史』の著者であるが、その源は父山雪の遺稿とあれば、山雪は画技の外に古画の探索、画人伝の蒐集に努めた美術史家でもあった。



藤原惺窩閑居図(部分) 山雪筆

季刊 美のたより No.112

平成7年8月24日

発行 大和文華館